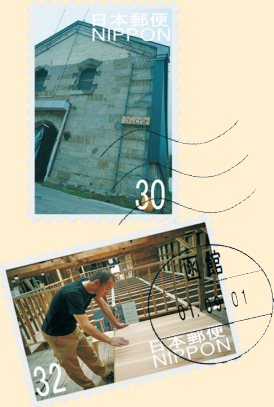
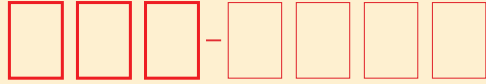


善頭エッセイ

はこだて旅便い

「今日もぷらぷら」

94



「蘇る幻の家具。新ブランド誕生？」

文月 斉 (ふみつき さい)
埼玉県出身。
人と街、自然と文化を題材に、
みちくさばかりの旅を続ける
エッセイスト。
函館、埼玉、大阪を拠点に
旅を満喫中。

前略、変わりはないか？

立秋から三週間以上経ったけど、君の暮らす町はまだまだ夏の香りが満ちているのだろうか。こちら函館は先月の台風以降、秋の気配の混じる風が吹くようになっていよ。今のところ、函館山の木々に紅葉が始まっている様子はないけれど、十日もすれば山葡萄の葉が色づき始めるだろう。もつとも、僕の暮らす部屋の窓からは、函館山の麓に広がる杉林しか見えないので、紅葉の進み具合を確認するには外に出て家を三軒ほどかわさなきゃならないんだけどね。

え、北海道にもスギの木があるのかって？ やっぱ君もそう思ったか。そうなんだよ、スギといえばどちらかという温暖な地域の木というイメージがあって、秋田杉で有名な秋田県あたりが北限なのかと思っていたら、函館のある北海道西部の地域には、けっこうな広さでスギの森林があるんだよ。日本全国を旅していると、よくぞこんな山奥にまで植林をしたものだなと感心することがあるけれど、津軽海峡を越えて北海道の地にもしっかりと植えられるってんだね。

函館近郊のこのスギの木を「道南スギ」の名で広く活用しているという動きがここ数年あるんだ。その名も「みんなですすめる木づかいプロジェクト」。北海道の出先機関の一つ、渡島総合振興局が主体となって進められている5カ年計画のプロジェクトで、今年には計画の最終年度を迎えている。これまでに、函館近郊で活躍する建築家やデザイナー、工務店、製材会社など7名からなる検討委員会が中心となって、学生を対象としたワークショップなどを展開してきたんだけど、函館駅前の空間に学生の考えた木のベンチや遊具を展示したり、旧市街の空き家となつている古民家を新たなイベント空間としてアレンジするなど、道南スギに潜む新たな魅力を発信し続けているんだ。

なかでも昨年の秋に開催された家具のデザイナーコンペはとて興味深かった。道南スギを使った家具を提案し製作してもらうのだけど、地域の新ブランドとして確立させていきたいと思惑もある中で開催されたデザイナーコンペだったんだよ。実はかつて函館には「箱館洋家具」と呼ばれる工芸があつて、旧市街に残る和洋折衷の住宅のように、西洋テイストの装飾を施した家具が家具職人たちの手によって作られていたんだってさ。幕末にいち早く開港し、多くの西洋人が住み始めた160年前の函館。日本のものとは異なるデザイナーの住宅や家具を持ち込まれるのを見て、当時の職人さんたちが刺激を受けないわけがないよね。和風家具を作つていた職人たちが技を競い合い、工芸として体系化していった箱館洋家具。多いときには10軒以上の家具店が軒を連ねる時代もあつたそうだよ。

この箱館洋家具をブランド化して、道南スギとともに地域の新たな産業にしたい。そんな思いを込めて開催されたデザイナーコンペに全国から多くの応募があり、見事最優秀賞に輝いたのが旭川市で家具職人として活動していた鳥倉真史さんの作品「Φ40(フォーティファイ)」だ。検討委員会の副委員長で審査員の一人でもあつた高田傑さん(高田傑建築都市研究室)の話では満場一致で選ばれたそうで、「柔らかくて傷がつかさず」と、家具にはとほ不向きといわれながらも、受賞した鳥倉さんが急遽函館に移り住み、家具工房を開店したというサプライズのおまけつき。ブランド化に向け早くも一歩踏み出し、高田さんでなくても興奮するよね。

さっそく古い倉庫を改装したという工房「くらera(クラクラ)」を訪ねてみたけど、木の香りの漂ういい工房だったなあ。受賞したイスにも座らせてもらったけど、スギの柔らかさと暖かみを感じられて、優しい空気に包まれるような座り心地だった。こんなイスに座つてストロブに当たりながらお酒でも飲んだら、至福の時が味わえるだろうなあ……。え、お酒が飲めるなら私も行きたいって？ 諭えだよ、諭え。君なら駅前の立ち飲み屋さんでも至福の時が味わえるだろうから、まずはそこから始めよう。それじゃあまた。

